
落とし物

催吐剤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
落とし物

【Nコード】
N8812P

【作者名】
催吐剤

【あらすじ】
読むと嫌な気持ちになれると思います。

ある晴れた夏の午後、タエコはクチャクチャとガムを噛みながら歩いていた。

タエコは信号が点滅を始めたのを見て、ほとんど味のしなくなったガムを吐き捨て、走り出した。

が、タエコが横断歩道にたどり着く直前に信号は赤に変わった。

そのまま構わずに進もうとしたが、右折するタクシーにクラクションを鳴らされ、タエコは立ち止まった。

溜め息を吐き、信号の横の赤いメーターが減るのを焦れた気持ちで見つめていると、トンと肩を叩かれた。

タエコは舌打ちをし、振り返った。

綺麗な身なりをした老人がいた。

老人は中腰になり、手を膝に置いて肩で息をし、もう一方の手でタエコの肩を掴んでいた。

「これ……」

老人は呟きながら、タエコの顔に、膝に置いていた握り拳をゆっくりと近づけた。

「落とした……落としたよこれ……」

開かれた手のひらには砂利と老人の汗とに塗れたガムが乗っていた。

「いらないわよ!」

悲鳴を押し殺し、タエコは言った。

「どっか行けよこの変態!」

老人はボカンとタエコを見つめた後、目に涙を浮かべ、顔をクシヤクシヤにしながら言った。

「そうか……そうなのか……」

涙を睨り、涙ぐんだ目で地面を見つめる老人からタエコは後ずさった。

尻のすぐ後ろを駆け抜ける車にクラクションを鳴らされ、タエコはビクリとし、反射的に道路の方を見た。

その間に老人がタエコの手を両手で掴み、唇をすばめ、タエコへ顔を近づけた。

「いや！」

悲鳴をあげ、顔を背けるタエコへ老人はアカンベーをするように舌を突き出した。

しかし、頬に予感していた感触がなく、タエコは薄目を開けて老人を見、絶句した。

老人のヌラヌラと光る舌の上に砂利に塗れ、薄茶色に汚れたガムが乗っていた。

蟻が二匹、ガムから老人の口内へと移動するのをタエコは見た。

「いただきます」

老人はパクンと口を閉じ、クチャクチャクチャと音をたて口を動かしながら「うう」「おお」と呻き声をあげ、溢れ出る唾液を次々に嚥下していった。

口端から泡立った唾液が溢れ、糸を引いて首筋まで垂れていくのを気にも留めず、老人はガムを噛むのに夢中になっていた。

呆氣にとられているタエコに何度も頭を下げながら、顔に満面の笑みを浮かべ、老人は言った。

「ありがとう、ありがとう、本当においしいよ、ああ、旨い、旨いよ！ 君の口の中の味がするんだ！ ありがとう、本当にありがとう、本当にありがとう！」

老人の吐き出す生ゴミじみた息にはほんの少しだけ、先ほど噛んでいたガムの匂いが混じっていた。

唾液がタエコの顔に小雨のように降り注いだ。

と、信号が変わった。

タエコは悲鳴もあげずに老人の手を振り払い、全力で走り出した。「ごちそうさま！ また頼むよ！」

駆けていく女の背中へ、老人はそう声をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8812p/>

落とし物

2011年1月9日00時11分発行